



『Slow Practice』のすすめ Part 2

しなやかで安定したアンブシュアで、
低音域から高音域へ、高音域から低音域へ、
小さな音から大きな音へ、大きな音から小さな音へ
吹けるように練習すること……クリス・ゲッカー

〈対談〉
嶋田明 × 竹原明

◎嶋田明
1953年京都府生まれ。12歳からコルネットを始める。作陽音楽大学卒業と同時に宝塚歌劇オーケストラに入団。定年退職までクラシック、ジャズ、スタジオほかの広いジャンルで活躍。現在、KTPA（関西トランペット協会）会長。社会人吹奏楽団の指導や指揮者も務める。

◎竹原明
1946年大阪府生まれ。13歳からトランペットを始める。京都市立音楽短期大学 作陽音楽大学卒業。第43回読売新人演奏会出演。1973年大阪市音楽団に入団、2007年退職。その間コンサートマスター、副団長、団長を歴任。KTPA（関西トランペット協会）顧問。

竹原 1968年でしたか、大阪・本町の相愛大学のホールでアメリカン・ブラス・クインテットを聴きました。それまで耳にしたこともない見事な演奏とテクニクだった。メンバーの中に『Slow Practice』に推薦の辞を寄せた若き日のジェラード・シユヴァルツ (Gerard Schwarz) がいた。ちなみに、前号でトランペット・マウスピースのサイズの話が出たけど、あの頃のシユヴァルツはバックの5Cを使っていた。シユヴァルツのサウンドにはただ感服するほか無かった。加古勉君が留学先のインディアナ大学からレッスンの内容などをごとあるごに伝えてくれた。アメリカのブレイヤーたちの必須教材であるシユロスバーグの『Daily Drills』を知ったのも彼からの情報でした。

(注) 加古勉君/東京藝大、ヒューストン大、インディアナ大に学ぶ。日本トランペット協会副理事長。加古、竹原、嶋田氏は元・相愛大学音楽学部教授の椿弘氏の門下)
やはり40年ほど前にニューヨーク室内管

が、4分音符くらいでゆっくり練習するという説明はあの頃の僕には理解できなかった。

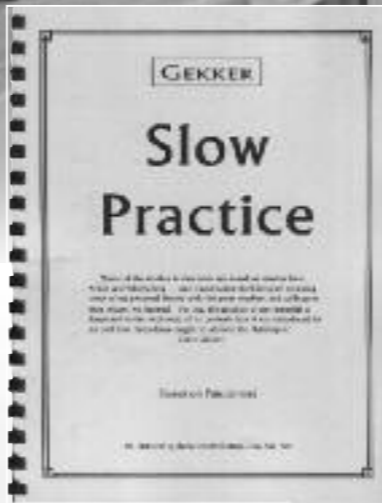
「4分音符でアルペジオをとにかく音符1ケずつをきれいに並べて楽にゆっくり吹け」とね。僕は「なんでこんなに退屈な練習をせんとあかんのや？」と思いました。今にして思うと『Slow Practice』そのものの練習法だった。ゲッカーさんも「#46はこれまで書かれたトランペットのエチュードで最高のものとされている」と書いています。

ずいぶん昔にウォレスが同じことを言っていたわけです。だからあの頃から欧米では分かっていたんだ。僕たちだけが知らなかったということになる。

ウォレスは、アーバン教本最後の12の曲集から「No.2 Fantasia and Variations in A」をB♭管で最初から最後まで吹いてくれた(この曲は日本では聴いたことがない)。ピアノ伴奏はロンドン交響楽団のピアノ二スト兼ホルン奏者のロバート・ノーブルさんだった。

あの時のリリカルで完璧な演奏は今でも覚えている。後にも先にもこんな見事な第2番は聴いたことが無い。後にCDになって発売されましたね。

さらにウォレスさんは、英国の名手ジョ



『Slow Practice』クリス・ゲッカー著
原文=英語 (日本語訳付き)
A4判・100ページ
品番: GTP6 ¥3,704 (税抜)
パイパーズのホームページから注文できます。又は order@pipers.co.jp
☎03-5205-3666 FAX 03-5205-3667

弦楽団の大阪公演でサンチェスのサウンドを聴き、アメリカの超一流ブレイヤーの凄さに驚きました。サンチェスは、若いころ難しい曲ばかり練習していたゲッカーさんに「音楽の発声」のために書かれたやさしい練習曲がどれだけトランペット演奏に役立つかを教えてくれた人です。

ヴァインセント・チョコヴィッツ (Vincent Cichowicz アドルフ・ハーセス、フィリップ・ファークスほかの名手が在籍した時代のシカゴ響トランペット) が大阪・難波でのトランペットクリニックで、受講した大阪芸大の学生たちの腹を押さえて「力を抜け、もっと抜け、もっと柔らかく」と教え続けた。そうするうちにポツと良い音(魂を込めた音)が出ました。

フィリップ・スミスも、丸めたティッシュペーパーを使ってエアの使い方を説明してくれた。「野球のボールをオリヤーツー!と投げるのとは違う。ティッシュのボールは力では飛ばない、ふわっと放つとふわっと速くに飛ぶ」と表現していました。

筋肉はダンベルで鍛えれば付く。アンブシュアを形成する筋肉はダンベルを使っても付かない。ホビー・シユーさんもリップ・バズイングの大切さを語ってはいるが「筋肉が疲れるからバズイングは30秒まで。1日数回に分けてやるのはいいが、本番前はダメ」と言う。1日中吹き続けたらもう吹かれへん。その辺のこと『Slow Practice』にちゃんと説明してある。

ラッパを吹くにはエアをコントロールす

40年経ったいまウォレスさんの教えこそ『Slow Practice』だったことに気づいた。

る必要があるので、支えが要る。力を入れて支えようとせずに、どこまで脱力して吹けるか? これは最も難しい。『Slow Practice』が目指すのは「こた」だと思う。力を入れないぐにやぐにやの状態では吹けない。最小限の力で吹く、つまり無駄なところを力を入れずに吹く術を極めれば、必要な瞬間に自然に力が加わりと解していいのじゃないでしょうか?

オイゲン・ヘリゲルの『弓と禪』(福村出版)を読むと……、「師範は弓を腕の力で引いてはいけけない。心で引け。つまり筋肉をすっきり弛めて力を抜いて引くことだと言った」
「師範は私が弓を引いて力を浪費するのを非難した」
「師範は強い弓を引き絞り、私に後ろへ来て腕に触るようと言った。師範の両腕は何もしていない時と同じように完璧に力が抜けていた」(後述の「無我と無私」P34から引用)
などと書いてある。

これらの言葉は、トランペット奏法とどこかで通底する言葉じゃないのかなと思います。

(注) 『弓と禪』/弓聖と謳われた阿波研造 (1880~1938) に
仙台で5年間師事したドイツの若き哲学者オイゲン・ヘリゲル (1884~1955) の弓術修行の体験記。この小冊

子は、1999年ベルリンで行われたヘリゲルの講演を契機に米国ランダムハウス社から出版され、欧米の知識人に大きな影響を与えた。訳書に『日本の弓術』(岩波文庫)、『弓と禪』(福村出版)、『無我と無私』(ランダムハウス講談社)などがある。音楽家ではオーボエの大家モーリス・ブルグにも影響を与えている。

『弓聖 阿波研造』池澤幹彦著。東北大学出版会 (ISBN24277)。2500円+税。
前述の小冊子3冊にはない記述や写真が収録されている

嶋田 僕は大学3年の時、当時ロンドン交響楽団の副首席だったジョン・ウォレスさん……確かそのとき弱冠24歳だった……の公開レッスンを大阪・本町の御堂会館で受けました。

竹原 あれは僕も聴いた。
嶋田 曲はフンメルの第1楽章。半分ほど吹き進んだら止められて「解釈も音色も良いが、もっと力を抜いて楽に吹け」とアドバイスを受けた。
「アーバン教本の中でもP20、#46は力の抜けた良い音を出すために大変重要なエチュードだ。とにかく力を抜いて小さな音でゆっくり吹け。疲れたら休め」と言われました。

アーバン教本P56の#69は16分音符だ



ジェラード・シユヴァルツ



ヴァインセント・チョコヴィッツ



ン・ウイブルプラハムの言葉「口の周りの力が抜けて楽に吹けるようになる」と、頬が少し膨らんだ感じになる」を実際に吹いて頬の膨らみを見せてくれた。しかし血気に逸っていた私は本当の意味を理解できませんでした。

それから40年経った今、ウォレスさんの教えこそ、ゲッカーさんの『Slow Practice』だったことに気付いたんです。日本語版の「使用の手引き」に同じことが書かれている。読んで愕然としました。

またアーバン教本(P20#46)は転調しながら全調整いで書いてありますよね。『Slow Practice』では各調ごとに休めるように書かれているので気楽に取り組める。おまけにコードネームまで書いてあるのでコード進行を理解するのにも打ってつけです。この配慮は心憎いばかりです。

ゲッカーさんは「転調」を、「ニュートンの万有引力の発見がパッサに影響した」とするドイツの音楽学者 Christophe Wolf の J・S・バッハ伝記の一節を引用して説明している。これは、少なくともヨーロッパとアメリカは同じ情報を共有していたということの証じゃないでしょうか。

竹原 1979年、関西のトランペット吹きたちが京都に集まり、当時ロイヤルフィルの首席だったスティール・パーキンス (Crispian Steele-Perkins ナチュラルトランペットにも長けている) を招いて金管アンサンブルをやったことがあったね。

としてやって来ましたが、「根性」だけでは「一流、超一流」にはなれない。僕が若い頃に『Slow Practice』が和訳の手引き付きで出版されていたら、もうちょっと吹けるようになっていたと思う。現役の頃は「理論は後からついて来るもんや」と思っていたが違いますね。実践と理論は常に並列であるべきでしょうね。

嶋田 悔しいのは、長いあいだ現役を続けて来たのに、最後まで不十分で終わったことですね。だから、これからの若い人たちから、世界の第一線と肩を並べる人が出て来てほしいという気持ちがあります。

竹原 「今日は何とかうまく吹けた」という日は年に何度かはあった。しかし自分なりに「まあ完璧や！」と思えたことは、悔しいけれど一回も無かった。今やら僕が『Slow Practice』をやっても、うまくはならんでしょ。もうええん

アーバン、シュロス バーグの本当のさらい方を楽に学べるように『SlowPractice』がある。

嶋田 既にプロになっていた僕は、パーキンスさんの下のパートを2曲ほど吹きました。たしかガブリエリだったかな？ところが真横で吹いている彼の音が聴き取り難い。「一体何吹いてるんだ？ちゃんと吹いてよ」と思いました(笑)。日本人プレイヤーのいわゆる「そば鳴り」とは全く違う、それまで経験したことのない感覚だった。

僕のファンで、かつ辛口の批評家の実兄が聴きにきていたので、演奏後に「どうだった？」と聞いたら、「お前の音は全然聞こえなかった。聞こえて来たのはパーキンスさんのよく通る素敵な音だけだ」と言われて大ショックを受けました。この数年前に受けたウォレスさんのレッスンを思い出して「ああ、2人は同じ吹き方をしているんだ」と気付いたんです。

自分のスタイルで自由に演奏するソリストは別として、セクションを組んで吹く場合、誰かが力んで吹くとそちらに流されて行ってしまう。力を抜き、リラクセスして吹いている人には、ついて行かない傾向が否めない。一瞬力んだとしても、お互いに力を抜いて吹く方向にメンバーの意思が統一されていけば、すぐに

です。しかし「やってみよう、この歳になってもさらってみよう」という気持ちにさせられるのは不思議やなあ。僕はアメリカ人じゃないから、島国の日本に生まれ日本で果てて行く。でも『Slow Practice』の存在と値打ちに気付いた今は、僭越やけどラッパを職業にさせてもらった僕らには、正しい形で次の若い世代に継いで行く責務があると思うんです。

しかし『Slow Practice』を若い人たちに知って欲しいと、なんでこんなにかきもきするんやろ？ 現役を引退したからかな？ 現役の頃は他人のことで気を揉んだやろか？

嶋田 とんでもない。自分のことで精いっぱいやった(笑)。竹原 子供や若いラッパ吹きたちに「アーバン、シュロスバークの本当のさらい方を楽に学べるように、ゲッカーさんが書いた『Slow Practice』とどう教本があるよ」と知らせ



フィリップ・スミス



ジョン・ウォーレス

元に戻れるが、そうでない場合は力みっぱなしになる。ウォレスやパーキンスさんのように、若い頃から『Slow Practice』の考え方が身体に沁みついていけばブレずに済む。このことがいかに大切なことかと思えます。

誤解を恐れずに言えば、ウォレスやパーキンスの音は、並んで吹くとスカスカ、パッサとか細く、当時の僕には良い音には聴こえなかった。しかし、客席で聴くパーキンスの音は、同じ人とは思えないほど魅力的で伸びやかに聞こえたのにびっくりしました。

どうしてなのか全く理解できなかった。今考えてみると、僕は自分の音が自分に良い音に聞こえるようにブラス・アルファの余分な力を加えて捻じ曲げ、仕立て直して

て行く。これはとても重要なことです。嶋田 『Slow Practice』が徐々に使われるようになれば、昨年11月にKTPAが出した『ボビー・シューTPクリニク(科学する演奏法)』に続くKTPAからのトランペット奏法に関する第2弾になる。しかも2



クリスティアン・スティール・パーキンス

吹いていたんだと思う。四畳半の部屋できれいに聴こえるように、コンサートやCDで聴いた名手たちの音を再現しようとするところになってしまっています。今なら僕の耳は成長しているので、本物の音をまじかで聴いても良い音に感じられると思います。僕の生徒たちには「スカスカ、パッサで吹くように」とまでは言わないが「四畳半で音楽しないように。自分の耳が遠くにあるようなイメージで力を抜いてノイズが出てても気にしない」と教えています。

竹原 弓聖・阿波研造師範が、矢が遠くへ飛ばないので困惑しているヘリゲルに「あなたの矢が遠くまで届かないのは、精神的に充分遠くまで行っていないからだ。的が無制限のあなたにあるように射なさい」と言いました。このくだりは「自分の耳が遠くにあるようなイメージしろ」に通じるような気がするけれど。日本に輸入されたトランペット奏法には整理不十分なものがあつたり、抜け落ちたものもたくさんあるんでしょね。トランペットは鳴らすこと自体に難儀するんで、「死んでもラッパを口から放しませんでし」的な根性で吹く人が僕も含めて多い。振り返ってみると、力まかせに疲労することばかりやって来た。それでも何とかプロ

つの内容はいろんな面で繋がっているのが素晴らしい。そう思います。

●誤植の訂正とお詫び

前号431号の本記事「Part 1」で、P33の末尾2行からP34冒頭3行の以下の部分、「僕は若い頃、米国のパロン社刊の『Daily Drills』を買いました。1ドル360円時代で5ドルもしました。東京行きの急行銀河が学割で1000円で乗れた時代です。高い本でしたね」を「僕は若い頃、米国のパロン社刊の『Daily Drills』を買いました。高い本でしたね」に訂正。またP34、1段目34行目の「2小節ごとに休みを」は「各調ごとに休みを」に訂正します。以上2つの誤植をお詫び致します。



クリス・ゲッカー (Chris Gekker)

ワシントン DC 生まれ。バージニア州アレキサンドリアで育ち、イーストマン音楽学校、メリーランド大学を卒業。アメリカン・ブラス・クインテットのメンバーを18年間務め、ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽院、コロンビア大学の教授を歴任。セントルークス室内管弦楽団首席、オルフェウス室内管弦楽団首席として演奏活動を展開。数多くの録音を残している。ニューヨークフィル、サンフランシスコ響、サンタフェオペラでもゲスト首席を務めた。スティング、エルトン・ジョンはじめ、多くのジャズ、コマーション・アーティストとも共演、テレビや映画音楽のためのレコーディングも多い。